窓明山

杉﨑　圭洋

■山行年月日:2020 年
3 月 21 日～22 日
■メンバー　大竹幹衛、佐藤利伊
大竹尚子、小沼充範、杉﨑圭洋、石川
貴大(21 日のみ)
■コースタイム:21 日　保田橋 8:15～巽
沢山 10:10～家向山稜線手前標高
1,400m12:30～テント場発 13:00～
窓明山 14:45～テント場 16:30
22 日　記録なし

当初、浅草岳でスキー合宿をする予定だったが暖冬で雪がなく、上の方に行けば雪がありそうな窓明山に変更となった。保田橋から夏道に入り最初の 1 時間くらいはスキーを担ぎ滑り易い土の上をストックでバランスをとりながらの登りとなる。そんな状況なので 2 名はかんじきでの参加となった。気温が高く薄着で登るが汗がしたたり落ちる。標高 1000ｍぐらいから雪が出始めてほっとする。巽沢山（1162m）まで来ると雪が安定してきてシール登高に切り替える事が出来た。ようやく山スキーの機動力を発揮して家向山と窓明山の稜線手前（1450m）の平らなブナの森に着いた。日帰りの石川さんはそのまま窓明山に進み、泊り組はテントを設営した。まだ時間があるので 3 名は窓明山へ 2 名は家向山へ行くこととなった。準備をしていると日帰りの石川さんが戻って来た。今日は荷上げで活躍してもらい感謝である。石川さんを見送り窓明山に向かう。テン場から 150mほど登り気持ち良い稜線歩きとなる。コシアブラの群生地帯を過ぎると窓明山への最後の登りとなる。以前、窓明山から東沢に滑り込んだ事や山頂の雪庇に雪洞掘って泊まった事など教えてもらいながらひと踏ん張りして平な頂上へ到着した。だいぶ日も傾いてきたが今日は下まで降りる必要がないので余裕がある。普段の日帰り山スキーとはちょっと違う時間帯の景色や感覚を楽しむ。帰路は夕方になり、少し硬くなってきた雪面で本日初の滑りを楽しみテン場へ戻った。

翌日は午後から天気が崩れるようなので、早めにもう一度、窓明山に行くことにする。今日は稜線に直登せず斜面をトラバースして最短距離のコースをとる。少し藪がうるさい箇所もあったが、なんとか稜線に出た。ここで一人体調が優れず無理しないで途中から帰る事になる。頂上手前の斜面で少しジグを切っ

窓明山まであと少し

て山頂に到着。今日は雲が多く予報通り天気も崩れそうなので早々にシールを外して折り返す。テン場に戻り素早く撤収する。ここから下の雪はモナカで滑りづらく、コース幅も狭いところが多いので板を担いでガシガシ真っすぐ降りた方が楽かなとも思ったが、行ける所まで滑る事にする。出発する頃から小雨になってきてコンディションはさらに悪化。予想通り滑りづらい雪でテールが引っ掛かり方向が変えづらく苦戦する。何とか木にぶつからないように下げて行く。巽沢山に着き少し強くなって来た雨を避けるため木の下に腰掛ける。しばらくたったが今日体調が優れなかった一人が下りて来ない。雪も滑り難い雪なので時間が掛かっているのかなと思いながら待つがなかなか下りて来ない。心配が増して来た頃、「おーい」と声が聞こえた。こちらからも呼び返すと又、声が聞こえる。こちらの場所を知らせる為に呼びかける。尾根の分岐でコースを外れた可能性が高いが声が聞き取りづらく、どの方向からなのか良くわからない。声が聞こえなくなって来たのでツボ足で迎えに行く。声を出しながら登って行くと斜面をトラバースして戻ろうとしているところを確認出来た。やはり尾根をひとつ間違えたようだ。体調不良と疲労とで苦しそうだが何とか藪をかわしながら来ている。ようやく合流する事が出来た。スキーを脱いだ方が歩き易いので、板を外してもらい稜線に戻った。巽沢山まで戻り休憩をとるが、体調が悪そうで食べられないようだ。昨晩飲んだ睡眠薬で体調が崩れたかもしれないとの事だった。その後の下りでも足元がふらつき薬の影響があったと思われた。

何とか保田橋に戻ったが、今回は反省の多い山行となった。山スキーの下りではメンバー全員の距離が開かないように細かく合流しながら滑り、分岐では特に注意を払う。メンバーが多いときは人任せになってしまいがちなので基本を忘れずに行動したい。